夢想王国物語

midnight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢想王国物語

【Ｎコード】
Ｎ２０３３ＢＡ

【作者名】
ｍｉｄｎｉｇｈｔ

【あらすじ】
王女が逃げ出した！その知らせを受けた准将レオは、ひょんな事が原因でハイドラ王国王女シャネラと出会う事になる。しかし二人の許されない関係が続いて行く中、シャネラに一刻を争う大きな問題が発生する。レオはその問題を解決する為に旅に出る事になるのだが、彼は本当に王女を救うことができるのだろうか。

プロローグ（前書き）

この作品はオリジナルです。
万が一登場人物及び設定、地名などが他作品と重なる場合がありましても、それは単なる偶然であり、故意によるものではありません。

あまり上手く無い文ですが、温かい目で見て頂けると光栄です。

※私用が無い限り、多分毎日更新します。

プロローグ

「それでは王女様、しばらくした後にまた御迎えに上がりますので」
朱色の夕陽を背に受け、無精髭を生やした中年の男は軍服の襟を正してから一礼した。
胸元には数々の栄光を数え上げた勲章が煌めいている。
彼の双眸からは、実力でこの地位まで上り詰めた人間の覇気が感じられた。

一方で男の正面の椅子に腰かける美姫は、男の声を聞いてどこか気に食わなさそうにしながらも、渋々と受け入れるような苦笑いをして「大人しくしていろ、というのでしょう？」と静かに返した。
ぶっきらぼうな言い方に男はしばし沈黙したが、誤魔化す様な笑いをして小さく首肯した。

「姫様の安全を考えてのことでございます。　特に今日のような日にはどのような者がいるか分かりませんし」
「詭弁だわ。　私がまた自分勝手に行動すると面倒なのでしょう」
王女はまるで人を侮蔑するかのような眼をしながら微笑を浮かべた。
「またそのような事を……。　しかしシズク様もいらっしゃらない今、御一人で行動されるのは正直危険極まりないのです。　ですから———」
「いつまでもうるさいわね。　用があるならさっさとお行きなさい」
彼女は空に舞う小さな虫を追い払うかのように手でしっし、と払い

のけた。

この国の将軍の一人でもある彼は、今日とあろう日にどうしても用があって王女の傍を離れなければならないのだが、いつまでもくどくどと忠告することにいつしか王女は苛立ちを覚えていた。

邪魔者扱いされた男は決まりが悪そうに喉を鳴らした後、「すぐに迎えをよこします」とだけ言い残し、さっさと王女の私室を出て行ってしまった。

――☆――☆――☆――☆――

外は今日と言う日にも関わらずしんとしていて、男が硬い床をした回廊を歩み去っていく軍靴の音が反響していた。

王女はしばらくそのまま席に腰掛けて茶を嗜んでいた。

しかし男の靴の音がしなくなるや否や、一国の王女とは思えない速さで自室のクローゼットに走った。

クローゼットには綺麗なドレスや優雅な着物が召使いによって並べられていた。　その中で、王女は服と服の間にこっそりと隠してあったローブに袖を通した。

見た目はまるで貧しい一般庶民のようで、一旦フードを被れば王女とは分からないだろう。

「ごめんなさいね」

ぽつりと誰もいない私室に向かって言い残し、ベッドの上にあらか

じめ用意しておいた国軍兵士の軍服を羽織って、彼女は誰にも気付かれずにこっそりと部屋を出た。

男はすぐに迎えをよこすと言っていたが、一階からここに上がってくるまでには少なくとも2分はかかる。　それに一般兵士を装えば怪しく見えるはずが無い。
日々常に誰かに束縛されている王女からすれば、無防備なその2分というのはチャンス以外の何物でも無い。

こうして、多くの人を巻き込むことになる王女の失踪が始まったのである。

01（前書き）

章や題名の関係で文字数が大幅に増減することがあります。　ご了承ください。

01

街は賑わいを見せていた。
それはまるで凱旋パレードにも匹敵する様な盛り上がりであり、晴れた夜空には大きな色取り取りの花火が絶えず上がっている。
城下町の通りでは様々な屋台が隙間なく立ち並び、店の者の掛け声と共に響くドンドンという重い音とまばゆい光が遠い夜空を彩っていた。
その色は青や黄色、緑や赤など非常にカラフルでありその火の花が空で咲く度に地上をその色で照らす。

今日はこの国、ハイドラ王国にとって記念すべき日であり、この日を迎え現国王在位５０年に値する。
そしてそれを祝福する祭りが城下町及び王都全体で行われていた。
大通りや円形の大闘技場周辺などは様々な大きさの屋台で埋め尽くされ、遠路はるばる今夜限りの盛大な祭りの為に王都を訪れる者も少なくは無かった。

そんな人ごみの中、人々の中をあても無くふらつく自分の前に、２０歳くらいの男が前方より歩み寄ってきた。
（茶色の髪に、背が高くて形相が険しいあの男は…）
「よっ！　また会ったな？」
外見とは離れ、馴れ馴れしく笑いながら歩み寄って来たのは親友、

フェンクスという男である。
そして何故語尾が疑問形なのかは不明だが。
端整な顔が雰囲気的に怖そうなのに加えて彼はやや短髪で、その髪を立てているというどう見ても不良にしか見えない男であるが、中身は外見と似合わず義理堅くて優しい一面を持つ。

「フェンクス、お前こそ非番なのか？」
「おうよ！　何せ将官の誰かさんが上手い事お上（かみ）に言って休暇を取った、と聞いてな、俺も同じようにさせてもらっただけだ」

ちなみに『将官の誰かさん』とは自分、レオのことを指す。
今日は祝賀祭だけあって特に王城の貴賓席が埋まるので、准将であるレオはその警護、そして式の参加者として普通は城に居座らなければならないのだが、そこは上に上手く融通を利かせて庶民の娯楽を共感させてもらっている。
しかし何を言ってもフェンクスも同じハイドラ王国の軍人で中佐。流石に二人もの高官が不在ではマズイのではないか？
レオがそれを訊こうとした時、彼が察して白い歯を見せながら先に言った。
「なぁに、本来非番だった部下を呼び出して俺の代わりに仕事させているから大丈夫だ」
（お前は鬼か！）
可哀想に。　折角楽しみに待っていた今日と云う日を、不甲斐ない

馬鹿のせいで台無しにされてしまうとは。
親子で花火を見に行く予定のあった彼の部下達に憐情を――

「あ、それよりもお前聞いたか？」

あ、話題を変えた。
上手く自分の権力濫用を誤魔化そうたってそうはいかないからなっ
……と思いつつ、フェンクスの表情が少し強張っていて、今は冗談
が通じそうな顔では無い。

「…って何の事？」

レオがまるでとぼけるかのようにぼんやりした表情を向けると、彼
は懐から一枚のメモ用紙を取り出した。

「近衛師団も出動しての極秘任務だレオ。　…本題から言うとだな、
王女様が城下町に出かけたきり帰って来ない……」
「何それ」

レオはあんぐりとした。
それを見たフェンクスも呆れ顔になっていた。

「…お前なぁ、王女様に何かあったらどうするんだよ！　今頃変な
奴に連れ去られているかも知れないんだぞ！」
「でも王女には護衛が付くだろう？　それにあのメイド長のシズク
もいるんだから」

この国の王女シャネラには多くの付き人がいる。
その中でも特に彼女にとって口うるさい世話役のメイド長、シズク
という女性が王女と肌身離さず付きっきりでいるはずなのに、はぐ

れてしまうと云う事は天と地がひっくりかえらない限りまず起こらないだろう。

「…実はシズク様は数日前に体調を崩されて休暇中だそうだ。　それに王女様は逃走がお上手だからな」

「要はシズク様がいないせいで、この人ごみの中で上手く逃げられたわけだな」

「そう！　だから俺達も巻き込まれたっつーわけ」

レオは耐えきれず愚痴の代わりにため息を漏らした。

「…ま、そのうち憲兵が見つけるでしょ」

「もし王女様が怪しい奴に絡まれてたらどうする！　襲われたりしていたらもう祭りどころじゃないぞ！？」

フェンクスは人ごみを気にせず叫んだ。

「馬鹿、お前はオーバーなんだよ」

全く、コイツは考える事が全て大袈裟で困る。
王女が今どうしているかだなんて知らないものは知らないし、それ以上どう反応していいか分からない。
それに、何故極秘任務なのかが分からない。　公に捜索命令を発表すれば早い話を――

「もっとさ、『そ、それは大変だ！』とか『よし、俺が絶対に王女様を守って見せる！！』とかいうリアクションはできねえのかよ？」

フェンクスは大袈裟に人ごみの中で両手を大きく広げて声を張り上げた。

が、その時、

「きゃっ」

短くて高い声が響いた。

前方から顔を隠すようにしたローブ姿の女性が歩いて来ていたのだが、フェンクスがあまりにも大きく動作したせいで、女性をわずかに腕で突き飛ばしてしまったのだ。

そのせいで驚いた彼女はバランスを崩し、バサッという音と共に尻もちをついてしまった。
同時に、顔を覆っていたフードの部分が取れて、金色の長い髪が女性の片目を隠した。

華奢な彼女は長い髪をほぼ真ん中で分けており、髪がかかった耳には外見に釣り合わないほど綺麗な耳飾りをしていた。
見た目では、よほどの貧乏人でも無ければ変な宗派の者でもなさそうだ。

しかしこれが市民に変装した王女…というわけでもなさそうだった。
なぜなら、王女の髪色はレオと同じ茶色と噂で聞いているからだ。

「ったぁ……」
「あー、すまん。　非常に申し訳ない」

フェンクスは素早く振り返って頭を下げると、尻もちをついてしま

い、痛そうにする女性に手を差し出した。
しかしフェンクスの心遣いとは裏に、女性は彼を睨み、そしてどこか一瞬怯えたような表情をすると彼の差し出した腕を振り払った。
そしてサッと立ち上がって、再び服で顔を隠しながら無言でその場を去った。

「あのぉ……。」
「ほら見ろ、言わんこっちゃない…」
全てを無言で見ていたレオが目を細めて言うと、フェンクスはしまりが悪そうに片手で頭をくしゃくしゃと掻いた。
この様子だと彼もかなり落ち込んでいる事であろう。
フェンクスは男にとやかく言われても馬の耳に念仏な男。　しかしタイプの女性から嫌われると、モロにショックを受けるのが彼の特徴なのだ。
「で、さっきから憲兵達が慌ただしくしているのはそれが原因か？」
レオが話の流れを変えてやると、フェンクスは喉を鳴らして声を通り易くしてから振り向いた。
「…ああ。　そうだよ。　おかげ様で祭りもクソもねえよ」
どうも先ほどから憲兵が走り回っている。彼らも王都の見周りで色々と忙しいだろうが、自分達の横を通り過ぎても気付かない。
普段は軍服に身を包んでいるので、肩章と胸元の称号を見た途端彼らは敬礼するのだが、今日は私服なので一般人にしか見えないら

しい。
最も、こちらの存在を知っていたとしても彼らは王女捜索を優先して無視するであろうが。
「まあそれはいいが、何故に軍部は公(おおやけ)の捜索命令を下さない？」
レオの無頓着な質問に対し、フェンクスは重いため息をついて彼の肩に片手を乗せた。
何か不満を言いたげな雰囲気を醸し出している。
「…もしそれがあの親馬鹿国王に知られてみろ。即刻首吊り台とロープが目の前に出されるだろうよ」
なるほど、王女の父は現国王に当たる。
しかも国王は親馬鹿で有名だ。
きっと自分の子に何かあれば国王の怒りは大爆発を起こし、その矛先が自分達に向けられかねない。
　だから極秘任務なのだろう。
「それに今回の任務は王女様を連れ戻すだけだ。　あくまで失踪したわけじゃない」
フェンクスが俺の肩をポンポンと叩きながら、『あくまで』と強調したのには何か理由があると思う。
　そもそも軍人である事に加え、彼にも捜索依頼が来たと云う事は、自分も後で『知りませんでした』では済まされない、ということ。
その上で命令を無視すれば確実に上官命令に背くこととなる。
「…で、手伝えと？」

がしっと手を握るフェンクスを見て、レオは怪訝な眼をしながら訊いた。

「勿論タダ働きじゃねぇ。　もし無事に王女様を連れ戻せたら給料は3倍――」

「了解したッ。　俺も全力で捜索させてもらう」

「……え、あ…おぅ」

レオは目にも止まらぬ勢いでフェンクスの腕をがっしりと握った。フェンクス自身、レオがあまりにも早く喰い付き過ぎてどこかきょとんとしていた。

まるで水も食料も無しで何日も砂漠を歩き続け、生死の境を彷徨って偶然オアシスを見つけた旅人のような顔をしている。

だが疑問が残る。

王女程の位となれば綺麗なドレスを身に纏い、すごく派手な格好をするので一目瞭然のはずなのだが。

ましてや、襤褸(ぼろ)やそれと同じような質素な服を着るほど王家のプライドは堕ちていないはず。

「でも今まで歩いて来たが、それらしい格好をした奴は見て無いな…」

「…、あ、それなら」

眉を顰めて考え込むレオに反応し、フェンクスは何やら思いついた

顔をして、先ほど懐から取り出した紙を再び広げた

「確か特徴が書かれている。
ええっと、…身長は１７０センチくらいで金色の髪をし、黒のブーツをはいている。
そして耳にはルビーとサファイアの散りばめられた王家の耳飾りを――」

（…嫌な予感…）

夜を彩る花火の明りと屋台の光しか無いのであまりよくは分からなかったが、先ほどの女性も何だかそれらしい物をしていた。

しかも恐ろしいほど条件が当てはまる。　髪の色と云い身長と云い、紙面上に書かれたものとそっくりだ。
とは言っても偶然、他人の空似ということもあり得る。　噂では彼女の髪色は茶色のはずなのだから。
しかし、王族は貴族中の貴族であり一般庶民はおろか、相当な位を有していない限り面会も許されはしない。
だから、ここにいる者ら誰もが本当の王女の容姿を目の当たりにした事が無いのだ。

「…た、たまたまだろう？」

恐ろしくなって訊き返したが、フェンクスは無表情で固まったまま口元さえ動く気配が無い。

01（後書き）

長々と読んでくださってありがとうございます。

誤字脱字含め、どのような感想でもお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2033ba/

夢想王国物語

2012年1月5日02時45分発行